

# ポラリスを仰ぐ北の大地から

## 倫理教育 — 必要なのは誰か —

北海道大学医師会 会長 寶金 清博

最近、社会から名声もあり高い職位の方が、転落し、あるいは、「炎上」するのを目撃する機会が増えた。身近にもそんな方々を見かける。

中学生の頃、和田心臓移植があった。当時、札幌医大の近くに住んでいた僕は、医大にまで歩いて行って見たことを記憶している。移植から数日の社会の反応は、「絶賛」そのもので、あらゆる賛辞の限りを尽くして、和田先生を称賛した。

しかし、その後、周知のように、様々な疑義が生まれ、最終的には、法廷に持ち込まれる大きなスキャンダルとなった。和田先生は、一生、その傷を癒すことができなかったように思う。

メディアやネット社会は、突出した人々や業績を高く持ち上げ、そして、その持ち上げた位置ポテンシャルの力を利用して、壊滅的な打撃を与える機会を狙っている。それは、ある意味、メディアの本質そのものである。『他人の不幸は、蜜の味』である。

高い職位にいることは、傍で思うほど楽ではない。北大病院長を6年拝命したが、メディアの取材対象になることを、覚悟して過ごしてきた。以前、週刊文春から取材の申し込みがあり、「文春砲！」と、心臓が止まりそうになったことがある。実際には、脳梗塞に対する新しい治療の取材であったが、一瞬、人生の些細な心配事の不発弾が心の中でまとめて爆発した。小心者である。別の案件で、しばらく、新聞記者に深夜まで自宅前で粘られた時も寝覚めが悪かった。

よく、「脇が甘い」と指摘する人がいるが、一国の宰相にしても、脇の甘さを指摘されるご時世である。登頂の難しい高山の険しい頂上に近づけば、転落のリスクが高まるのは、「脇の甘さ」とは関係なく、必然である。

特定機能病院の病院長塾では、いろいろなことを教えるが、コンプライアンスの講義がある。高い位置にいる方々にこそ、倫理教育と正しい登山・下山の作法を教育すべきかもしれない。

## 新たな時代の幕開けに思う

札幌医科大学医師会 会長 土橋 和文

改元を迎える。思えば30年前、「華奢な筆致の文字」の額をして故小淵官房長官の会見、昨日の様だ。医療界には定員倍増により若者が溢れていた。誰もが成長と狂乱の時勢、社会は元気で若かったが、消化不良で若干辟易としていた。

「平成」、多くの震災があった。しかし、比較的安定した「時代（とき）」として記憶されるだろう。医療・医学は前視的には、確実性と汎用性は桁違いだが、想定内の変遷であった。しかし、後視的にはターニングポイントは多い気がする。

悪性腫瘍および生活習慣関連疾患の薬剤と非薬剤治療は順調に進歩を遂げた。結果として過剰専門分化と補填機能が明確化した。高度の専門性分化と総合管理（総合診療、医学教育・倫理、医療経済・法制・医療安全、多職種連携など）の必要性が格段に増えた。

また、IT産業革命による情報爆発と個別深化は明確となった。健康問題がバラエティーショーないしテーマパーク化した。SNSにより情報は爆発・個別化し何が本筋か見えず語りにくくなった。画像診断は感知能力・記憶範囲を越え、AIは日常診療のダイナミズムを失色せしめた。シミュレーション装置は現実と仮想空間の垣根を越え、臨場感たっぷりだ。誰もが擬似体験に満足気である。逆に、人を繋ぐ「絆」が見つからない。

新たな「時代（とき）」は、我々に何をもちたすだろう？ 予見可能であれば苦勞なし、「できない」のが世の常で面白い。課題は課題としてあり続けるであろう。医学研究ではゲノム医療と再生医療はまずは堅いところだ。老化解明と抑止は期待大。社会情勢：高齢化と縮小社会への備えが必要となる。「病を持ちながら社会の一員であり続け、看取る」難しい。ときに、医療者は主体的である必要もあろう。若者には期待したい。年寄りにはせめて邪魔しないように。

